

Ⅵ. 塩那地区における緑の環境管理のための植生学的考察 Vegetationskundliche Grundsätze für die Pflege einer an Grün reiche Umwelt im Bezirk Enna

1. 地域の環境・景観における緑の位置 Rolle der Vegetation für Umwelt und Landschaft des Bezirks

塩那地区および周辺域には、都市の発達に限られており、小規模な都市、集落が海拔 300 m 以下を中心に散在している。海拔 300 m 付近以下には水田や畑などの耕作地が広がっている。すなわち、人々の日常生活域は除草、施肥など集約的な管理を多く必要とする耕作地として利用されている。さらに、山足部にあたる海拔 300m から 800m にかけては、スギ、ヒノキ、アカマツを中心とする植林またはクリ、コナラ、クヌギなど夏緑広葉樹の二次林で占められている。海拔 800m をこえる高海拔地では、一部カラマツ植林やミズナラ二次林に改変させられているが、コカンスゲープナ群落などにまとめられる自然林が広域的に残されている。地域における本格的な緑として多様な機能を有するものは、耕作地を囲むように山足部から山腹さらに山頂部にかけて広がっている森林植生に他ならない。

耕作地における十分な生産力を長期的に維持し、将来にわたっても保証するのは、多様な機能を果しているこれらの森林植生である。しかも、人々の緑とのかかわりは、試行錯誤の結果であったかもしれないが、地域における自然の秩序、環境保全の範囲内での土地利用、開発であり、水辺や尾根筋など“弱い自然”は残し、神社のうっそうとした森、山頂付近の地域環境の源流を確保することによって景観の保全に努めてきた。今日、科学技術の進歩と人々の生活様式の発展は、多彩な機能をもつ豊かな自然の大規模な改変を可能にしたのみならず、人々が直接的に緑とふれあいをもたない生活が営まれ始めている。しかし、緑で代表される自然環境は、単に木材生産工場（＝植林）として位置づけられるだけでなく、人々の生存基盤として、文化の源として、子孫へ伝えなければならない豊かさとして、見なおされなければならない。

緑で代表される自然環境と人間もその一員である生き物とのかかわりあいについては、各方面からすでに論じられている（藤井1971, 宮脇1970）。人々の生活との係りとしての緑の効用については、科学技術庁資源調査会（1970）は以下の6項目にまとめている。

- (1) 気象および気候緩和の効用
- (2) 大気の清浄化作用
- (3) 防音的効果
- (4) 防火的効果
- (5) 自然災害に対する効用（防災林）
- (6) 心理的効果

地域の環境における緑は、上記6項目にまとめられるような効果、効用が総合的、補完的にあらわれている。すなわち、環境の保全・緩和、創造、保証・指標の三面性をもつのが緑であると位置づけられる。

2. 生きた構築材料としての緑 “Grün” als lebendiger Baustoff

すでに示されているように、緑で代表される自然、すなわち植生は、人間の健全な生活、生存の基盤である。したがって、人々の生活、生存環境を形成、保全していくには、基盤となる緑を“生きた構築材料”として積極的に保全し、共存し、創造していかなければならない。

科学技術の進歩と土木工学の技術の革新は、過去において多くの時間と労力を要して始めて可能であった大規模な立地の改変をきわめて短期間で可能にした。このことは広い面積にわたって無植生域を生じさせ、長い年月をかけてできあがった生態系の破壊、生物社会の基盤の消失をももたらしている。しかも、地域の環境、景観の破壊でもあり、自然環境の急変への保全、補完性の低下となり、持続的な環境創造機能を欠くことを意味する。

緑＝植生を生きた構築材料として環境創造に積極的に取り入れる理由として第1に機能的効果の多面性をあげることができる。貧養乾生立地、急斜面の自然度の高いヤマツツジ―アカマツ群集、河辺のアカメヤナギ群集などは、“弱い自然”の一つである尾根筋、水際などを保全すると同時に、斜面保全林、防風林、増水時の流水量緩和、景観の多彩性の増加などの効果がある。しかも、植生は、立地条件の差異に応じて、有機質に富んだ土壌、林床植生、土壌生物をも含めた生態系の均衡と安定を保つなどの効果がある。

緑＝植生を生きた構築材料として取り入れる効用の第一として効果の持続性をあげることができる。鉄やコンクリートで代表される人工系の構築材料は、一般に完成時を頂点として時間の経過とともに価値の低下をみる。一方、植生は、生物社会の秩序に応じて利用されるという前提のもとで時間の経過とともに生長、遷移し、より機能性の強い植生へと発達していく。個々の植物は消長、世代交代をくり返しながら、植生は遷移し、より多面的で機能性の高いものとなる。とくに、その土地本来の樹種を立地条件の差異に応じて利用するのがもっとも効果的である。

第3の効果、必要性として、地域の文化の基盤としての有形、無形の効果をあげることができる。現存する植生の多くは、モミヤシラカンの例をあげるまでもなく、ながい人間の歴史の過程において人々の生活の一部として一定のバランスを保ち、景観としてのまとまりを形作ってきた。斜面林、神社林、屋敷林など郷土の森としての自然度の高い植生は、その土地の自然環境をもっとも多面的に表現しており、一定の秩序をもった自然、生態系として機能している。したがって、守られてきた自然度の高い植生からさまざまな人為的干渉と立地条件の総和として生育している代償植生まで、景観を形成している植物、動物、環境、立地、人間活動、歴史的過程などが、多面的に文化や教育の発展の土壌の役割を果していることを見なおすべきである。